

幼き物語

えびら
箆田鶴子



晶文社

著者について

籠田鶴子（えびら・たづこ）

一九三四年、東京生まれ。脳性小児マヒで重度の身障を負う作家。

著書、「神への告発」、千葉敦子との往復書簡

「いのちの手紙」（ともに、ちくま文庫）、

「他者への旅」（筑摩書房）

おきな
ちのがたり
幼き物語

一九九二年四月三〇日発行

著者 籠田鶴子

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二、一、一一二

電話東京三二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・美行製本

© 1992 Tazuko Ebara

Printed in Japan

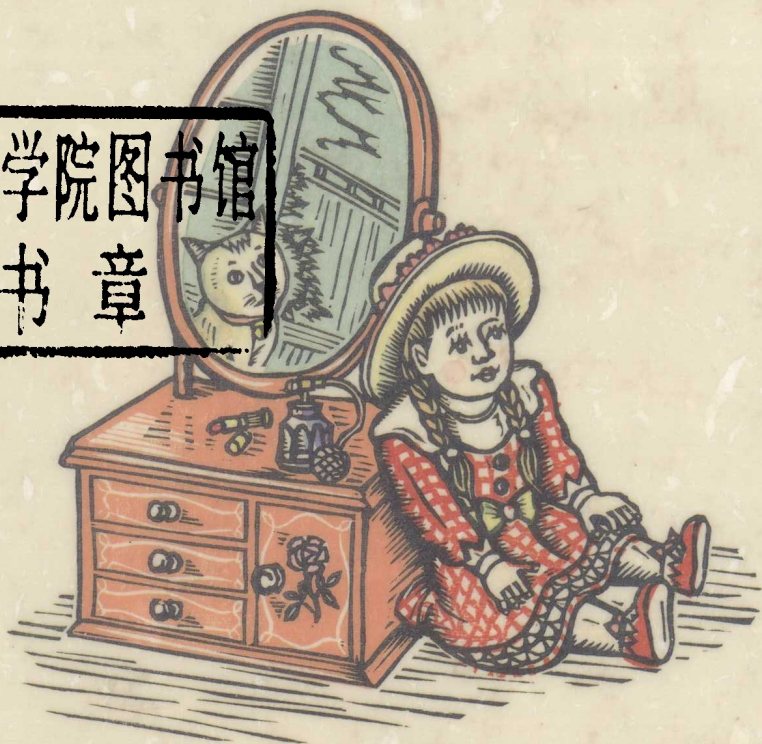
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたしません。

幼き物語

えびら
箧 田鶴子

工業学院図書館
藏书章



晶文社

幼き物語

えびら
箆 田鶴子



品文社

ブックデザイン 日下潤一
写植印字（カバー・扉・帯） 前田成明

幼き物語 目次

	てんとう虫	9
	たくあんのお姫様	11
	茶色の犬	13
	皐月 <small>さつき</small> とビオフェルミン	17
	茹で卵	20
	白いレギンスの汚れ	26
	「猫前のちゅう助」と「米の母」	29
	板チョコと豚まんじゅう	32
	岩おこしの思い出	35
	丹毒と眼鏡の女	40
	蛇姫様と龍	48
	かまきりの墓と鬼灯 <small>ほおずき</small>	54
	猫のレコード	58
	猫の歌	64

- のし餅と豆撒き 68
- 舟形の寝椅子 76
- 白足袋とこはぜ 80
- アイウエ王とカキクケ公爵 85
- 寒紅と猫鏡 89
- おふんちゃんとビヤ樽上の踊り 96
- 「ねずみの歯」と「小僧来い来い」 104
- 竹槍と「花垂れて」の歌 109
- 帽子屋の店先 113
- すみ子の思い出 120
- 白蛇の夢 129
- 野見山さんと切られ与三 136
- 珍しいもの 147
- 空襲と「左大臣雛」と米兵 152

和服	159
狐の居ぬ間	170
花と残骸	177
時計あれこれ	184
祝後の水	190
おめでたき人	196
ハリー・ベラフォンテ	200
祖父のトランプ	207
猫踊り	217
怪談・寺の裏	226
車中の裸女	237
あとがき	248

てんとう虫

「神様がね、ためしに一匹、作ってごらんになったの。田鶴ちゃんや私たちが毎日、折り紙や何かで遊ぶでしょう？ 神様だって時には退屈で、遊んだりなさるのよ。それでね、ある日『てんとう虫』をお作りになったら、とっても綺麗に出来たんですって……」

果して彼女の「創作」だったのだろうか。

姉の掌に、小さな楕円形の、てんとう虫の艶々した背がまるい。

紅いろを、光線の加減によって紺から透明な空色へと変化する線で亀甲に区切り、区切られた一つずつ、和菓子焼き形のような黒点に二か所、黄色が輝く。

先刻、畳の縁から動かさず、何だろ々と指で触れた途端、模様が割れて羽となり一メートルほど先へ飛ぶと畳へ止まり、微かに動く。

姉を呼んだ。

そつと掌へ移し、彼女が話し始めた。

開け放つ窓。濡れて黒く松の幹が見える。

雨あがりの陽光だった。

「神様は満足なさり、折り紙の鶴を飛ばすように、ふうつと息を吹き込んで、お膝から雲の間を地上へと落しておやりになったの。ところが明るる日、神様は前の日の綺麗な作品が忘れられず、作業をお始めになりました。思い出しては作るのだけれど、出来ないの。これも違うし今度も違う。よし今度は、と意気込んでも、やはり駄目、夢中になった神様は片端から下界へ捨ててしまふ。何十、何百と形をこねて彩色、どうしても最初の美しい色や模様が出せない神様は、ご自分の周りに道具や作りかけを山と散らしたまま、声を上げて泣き出しておしまいになる。すると神様のもう一つ上の神様が『何故そんなに泣くのですか』とお尋ねで、理由をお話しになった。その神様は仰言ったのですって。『前作を真似よう、と思うからですよ。作品はすでに作り終えたのです。同一のものは二度と出来ません。つくるとは毎回、新たに創らねば、満足を得る作は出来なんでしょう』とね。だから、てんとう虫は沢山いるけれど、滅多に同じ柄のがないんだわ」

たくあんのお姫様

「ほら、スカートの部分を食べちゃった。裾のフリルが斜めに千切れてるでしょ。今度は手だわ。痛いって言ってる」と姉が言う。

瞳を輝かせ、真剣に見ようとするのは、彼女が箸で宙にかざす、歯形に欠けた輪切りのたくあんだ。濃い縁どりで淡黄色、繊維の透けるその一切れに、何の影も見当らない。

それでも私に疑う気持はまず、なかった。

一切れずつにお姫様は必ず、いる。私の目に見えぬのみだ。瞳をこらすと何処か横顔と細い手足、絵本で見る「天の羽衣」様の白衣が見える気がした。「判る？」と促す姉。

私は感服し、大きくうなづく。

「今度は頭よ。ほうら半分、あ、皆食べた」

大袈裟に眼をみはって呑み込む様子に幼い私は顔をしかめる。普段、優しい人が何故、こんな残酷なことを平然と笑って為すのか。

顔をかじり頭を欠き、徐々に食われるお姫様の痛さを思うと、不思議でならなかった。

茶色の犬

迷い込んだのか拾ったか、下校時の彼女に従いて来た、と姉は言う。茶色の犬だ。眼を囲む白色が鼻筋を通り、口へ至ってカイゼル髭の感じに、八の字に顔面左右を分けている。

鼻の先は黒で頭頂と耳、四肢の先端も黒、関節辺から下が純白で、丁度ソックスへ靴の格好だ。成犬、雑種の雌である。

成犬といってもようやくとといった頃だろう、人懐っこく鼻や身をすり寄せ、姉が皿に牛乳を入れ、置いてやると、急ぎ口をつけた。

庭先。取り敢えず紐でつなぎ、彼女が引くと、じゃれて飛び跳ねて足元へ紐がからむ。

歩けず縁側へ坐る私にも、前肢を揃えて縁へ載せ、真剣な目がまっすぐ、こちらの瞳に見入って、激しく尾を振り、上向きに鼻を突き出す。

こわごわ指を触れると湿って冷たい。

「ねえ、パパにお許しを頂いて、家で飼いましょう。名は何が良い？ 私たち姉妹の頭文字を一字ずつとって『タチ』ってのはどう？」

言いながら、はやくも我が家の一員と思うらしく、犬の前にしゃがみ、頬を寄せて頭を撫でる姉だ。

賛成して、実はまだ少し犬が恐い。

二人とも黙りがちなには訳がある。

鳴き声をうるさがって動物の類を飼わせぬ父が多分、許さぬと予想されるからだ。

茜色の空に、渦巻の蚊取線香の淡青の煙りが、縁先で時折、風に乱れて香る夕。

たしか金木犀の大樹が、芳香を撒く庭だった。

その夜。座敷である。

新聞を読む父は、姉を主に私が従の形で代る代るの懇願へ、案の定拒否だ。

娘たちはひるまない。

「見るだけでも見て。とつても可愛い。利口そうな目をしているわ。本当に賢くて、もうお座りや、お手も覚えちゃったのよ。一度、ねえパパもごらんになって」

泣々、父も縁側へ立つ。

犬を連れ出して、姉は縁側へ寄る。

嬉々として犬が、鼻と前肢を縁側に差し出した途端だ。見つめた面に驚きが流れ、確認の趣、なおも犬を見下ろしていた父は、駄目だと低く一語、背を向けてしまう。

「ともかく、駄目だ。捨てて来なさい」

和服姿が奥へ戻って行く。

「何故？ どうしてなのよババ？」

物陰に犬をつなぎ、半泣きで問う元の座敷。

「あの犬は、飼主を食い殺すという言い伝えがある面相だ。恐らく飼っていた人も縁起が悪いと捨てたんだろう。今夜中に元の場所へ返して来るんだ。飼うかと思わせて時間が経つほど一層、犬も可哀想だから……」

「それだけ分っていて、何故、ひどい！」

「うるさい！」と父。

平常、迷信や俗信を忌み嫌う父が、の衝撃と失望も、女学生の姉にあったろう。

けれどそれ以上、どう嘆願しても容れてもらえぬと知る姉だ。あせた瞳と唇でしばらくうつむく。